

# 未来を拓く課題に、果敢に取り組もう！



## みんなが元気を出した県平和委員会大会

県立青少年会館(水戸市)で6月11日(日)開催さる



大会は、伊達代表理事の挨拶で開会しました。伊達氏は「原発に関しては、エネルギー対策を含め生活全体を考えなくてはならないが、私たちの「核を無くそう」という運動は、「核兵器の原発も核の脅威は同じ」という認識で、新しい運動の分野をつくりだして行くことが必要ではないか、と述べました。

来賓は、日本平和委員会から岩槻事務局次長、日本共産党から稲葉書記長が駆けつけてくれました。岩槻事務局次長は閉会まで出席して頂きました。

岩槻氏は「茨城は震災被害と同時に原発被害も大きい。人命と人権を守る支援、軍事費を削って復興支援に向けた取組の重要性」を訴えました。

稲葉氏は福島原発事故と同時に、東海第2原発の問題に触れ、「万が一に事故が発生した場合、20km圏内の避難者は70万人(福島第1原発では7万人)になる」とし、根本的には停止(廃炉)しか方法はない。国会やマスコミが「大連立か」を叫んでいる背景は、「震災復興を掲げて、消費税の増税、憲法9条を変える」ねらいがあり、それを許さない平和委員会のとりくみに期待を表明しました。

### 6割の発言が原発問題関連

大会は10時に開会。午前中に事務局長の提案を受け、午後1時から3時まで、2時間余の討議を重ねました。

発言は原発事故と今後の運動に関連した意見が多くありました。安全神話の崩壊、重要情報の非公開、電力不足の問題、自然(再生可能)エネルギー情報の不足等が提起されました。また原水爆反対と「原子力の平和利用」の両立に対する意見もいくつか出されました。

運動を進めるに当たって、地域でも県単位でも学習を進めることと他団体との意見交換と共同行動の重要性が提起されました。また茨城県では東海第2原発も危険な状況に陥った情報もあり、独自の取り組みの重要性も提起されました。

組織拡大では、昨年の大会から今大会(6/11)まで、75人の新しい仲間を迎えた事が報告され、地域を中心にとりくんだ成果を確認しました。一方さまざまな理由で退会した方が42名あり、純増は33名になりました。全会員数は1043人で、

これは最高の峰を更新したことになります。

一方、1月から大会までの「100人を迎えよう」の運動を6月中継続し、100人を実現するため、引き続き頑張ることを確認しました(7月以降は全体で月5人以上の新しい仲間を迎える、草の根運動の継続)。発言のいくつかは、若い人たちへのアプローチ、特に青年・若者に向けた運動にシフトする重要性が提起されました。



大会は、活動報告・方針案・決算・予算とも承認しました。議案に対する修正意見もいくつか出され、用意されていた大会決議案(原発問題)は、第1回常任理事会で検討することにしました(これらについては、修正したものを大会資料として後日配布します)。

### 新役員を選出で、新体制固まる

人事では、11年度理事・会計監査の提案を承認しました。休憩中に新理事による第1回理事会が開催されました。この中で、代表理事(3名)、常任理事(19名)、事務局長(1名)が推薦されました。休憩後、理事会が提案した上記の役員全員が承認されました。

大会は代議員・役員と来賓2名、合わせて70名が参加し、成功裏に終了しました。



### 原発を考える学習会



#### 「安全神話」はごめんです

とき：6月18日(土) 13:30~  
ところ：堀原市民センター(公民館)集会室

#### ●福島原発事故と「安全神話」

小川 弘二さん(高校生に原子力の基礎を教えた元教師)  
主催：水戸西平和の会  
問い合わせ先：小川(029-251-6525) 松原・伊藤(029-252-3806)

#### 「今だから 原発を考える」

とき：6月26日(日) 13:30~  
ところ：笠間公民館 2階会議室  
資料代：500円

#### ●今、知りたいことにお応えします

山口 幸夫さん(法政大学教授・科学史)  
主催：「憲法九条の会・かさま」  
問い合わせ先：多崎(0296-73-0122) 高田(0299-45-3466)



#### 「茨城で原発事故を考える」

とき：7月2日(土) 14:00~16:30  
ところ：ふれあいの里ひまわりの館ホール  
(石岡市大砂10527-6 TEL:0299-35-1126)  
資料代：300円

#### ●本当のことが知りたい! 原発と放射能

菅波 完さん(柏崎・刈羽原発の閉鎖を訴える  
科学者、技術者の会事務局長)  
主催：茨城で原発事故を考える講演会実行委員会  
問い合わせ先：合田(0299-42-2240) 高栖(0299-22-4856)



### 平和新聞

2011年6月15日(水曜日)  
1959号(毎月5,15,25日発行)  
1950年12月16日第三種郵便物許可 発行 日本平和委員会  
1部140円 月額400円 〒105-0014 東京都港区芝1-4-9 平和会館  
(郵送料月額120円) 電話03(3451)6377 FAX03(3451)6277

### 平和かわら版 2011.6/15 平和新聞茨城版 No. 597

発行：茨城県平和委員会 〒310-0912 水戸市見川5-127-281  
Tel/Fax 029-251-2806 E-mail ibahei@amber.plala.or.jp



# 『紫金草』(中国小学5年生教科書『品德与社会』より)

## 南京大虐殺の地に咲いていた小さな花

石岡平和の会の植田金雄さん、鈴木俊夫さんから、平和かわら版で紹介してほしいと、紫金草(花だいこん)の由来についての文章が寄せられました。



1939年の南京、この街の至るところでの惨劇は、あたかも白黒フィルムが繰り返し映し出されるように何時までも途切れることがない。内蔵を引き裂かれるような泣声が続くと、後には死のような静寂があたりを覆った。流弾が飛び交う中、山口誠太郎は紫金山の麓の病院で横になっていた。時は春。歴史がとてもしきな誠太郎は、彼が憧れる六朝の古都(南京)を一度見てみたいと思っていた。

誠太郎の上官は、彼が憧れているこの街では、既にこのような殺戮が行われていることを告げていなかった。美しい古都では、野獣に引き裂かれ、血と肉がぐちゃぐちゃになった傷口、凶暴な日本兵により青銅の木の下で人類が想像も出来ないほどの罪悪が展開されている。これは罪悪のなかの罪悪、悪夢の中の悪夢、際限がない。この為、暴行を行った誰もが、判断力や感覚さえも失くしてしまっている。黒煙が濛々と立ち込める中、至る所から婦女子の泣声がこだましてくる。その泣声が母親のものか、妻のものか、はたまた女の子のものか、誰にも判らない。誠太郎の親しい人が、南京は陥落し日本では国を挙げて歓喜している事を彼に告げた。この喜ぶ声と悲惨な泣声とが天空で交じり合う。これは人類史上、最も耐えがたい一幕である。

なぜこれらの人を殺さなければならぬのか?戦争とは正に人間同士が殺しあうことなのか・・・?

誠太郎は紫金山の下をぼんやりと歩いていた。霞んだ中に、彼は一人の小さな女の子を見かけた。彼女は大きな頭と、恐怖に満ちた眼をしていた。足を踏み出し走って逃げようとするが、却って足は動かず、雨水が黄色の髪の毛を伝って滴っている。彼は女の子に「怖がらなくてもいいよ。何もしないから。」と言った。しかし女の子は顔の向きを変えて、足をひろげて走り出した。が、数歩行くと又立ち止まり、恐る恐る一本の小さな紫色の花を彼に手渡した。

まるで雷に撃たれた瞬間のように、この世の全てのものが潮水に流された後に残った一片の純粋である。人として生きる事の素晴らしい輝きは、しばしばこの様な時に降臨する。自由と平

和、愛と同情、善良と美しさ、これらのどれにも例えられない。命にどんな意義が有るだろうか?小さな女の子が消えていったところは、野にも山にも紫色の小さな花で満ちている。花の海に入ると、つま先から頭の天辺まで、これらの花がじっとりとまとわりつくようだ。

1946年、日本が敗戦後初めて迎えた春、誠太郎の近所の人たちは、その薬学者の庭にきて見たことの無い小さな紫の花が満開に咲いているのを発見した。この花は、中国では“二月蘭”と言われ、日本では“花大根”と呼ばれており、この二つの名前を知っている人は少ない。しかし誠太郎はその花に別の名前を付けた。日本で広く知れ渡り、中国でも同様に知れ渡り、しいては世界中でも有名になったその花の名は“紫金草”です。

過ぎ去ったことを深く心の中に仕舞い込んだ。だが思い出すまいとすると、却って何時までも忘れ難くなる罪悪感は、なぜ時間と共に去って行かないのか、それが正に謝罪であり、解決の方法は無いのです。誠太郎は一つの事業を開始した。その事業は彼の命が尽きるまで終わる事はなかった。庭の花が最初の種を結ぶと、誠太郎はその種を集めて近所の人たちに送り始めた。四人の子供達は成長し、それは賑やかな大家族になった。寡黙な父親が紫金草の故事を話し始めると、子供達は騒ぐのを止め、初めてやりすごす事の出来ない苦痛を感じた。

「子供達よ、これは私が中国南京の紫金山の麓から持って帰ったものだ。お前達は以後これを“紫金草”と呼びなさい。別の名前で呼んではいけない。」

その後、家族全員で誠太郎の手助けをした。夕食後、家族全員でテーブルを囲み、種を選り分け、ふるいにかけて、小分けに包装し、探せるだけの住所を書き、紫金草の故事を添えてそれを遠方の人々に発送した。人間らしさは共通のものであり、心もそのようであるべきであり、人々は平和のこの小さな花に祈りを込めて種を捲いている。誠太郎は、彼がこの世を去り数十年経った今日、紫金草が既に日本国土に広く分布し、ひいては靖国神社の周辺にもこの可憐な小さな花が咲き誇っていることを、想像しなかつたらう。

## 【シリーズ】 わが街・わが会員

常陸太田市 / 篠原 睦美 さん (常陸太田平和の会)



### 新「東京物語」への期待

「東京物語」という佳品があります。小津安二郎監督による1953年の作品です。わたしが「東京物語」を鑑賞したのは、今年の2月でした。山田洋次監督が新「東京物語」を撮るとい記事を読み、あわててDVDを借りました。

老夫婦が、しばらくぶりに子どもたちに会うために上京する、やがて帰郷した母親が逝去、最後まで老父に寄り添ったのは次男の未亡人だったという「物語」の骨格をどのように加工し現代の世相をみつめるのか楽しみにしていました。

ところが5月の初旬だったでしょうか。山田監督の次のようなコメントを読みました。新「東京物語」は、「東日本大震災もあり、脚本を大幅に書きかえて撮影に入るため、完成が遅れる」というものです。「男はつらいよ」は、一年中旅暮らしの寅次郎が柴又という故郷に戻る場面からはじまりました。わたしの好きな「息子」という作品の舞台も東京です。老いた父親が出来の悪い次男と高学歴の長男を訪ねるとい物語の中に、大都会の荒波に揉まれながらも優しさを失わない次男の成長を描きました。

東日本大震災は、地震による被害ばかりではなく原発によって移住を余儀なくされた被災者を大勢出しています。わたしの想像力では余りある大震災後をどのように描くのか。今から心待ちにしています。

1966年、誠太郎は、その小さな種に、依然として重く沈んだ心を携えたまま、この世を去った。只、子供達に一つの言葉を残した。『紫金草は、永遠に改名してはならない。どの一本の花にも、背後には無実の罪で死んでいった人の魂が有ることを、その小さな花を見るすべての人の心に銘記し、人に害を及ぼす戦争を繰り返してはならない。』

たかが一本の紫金草を植えることではあるが、その行為には人類が生まれながらに持っている良識のよみがえりの願いが込められているのです。 【翻訳：田口幸次】